

## 編集後記

本年度の懸賞論文応募数は、過去最多だった昨年度の89編を上回る92編だった。昨年度から応募締切日を12月に変更したためか、応募数が増加した。幸いなことに本年度もこの傾向は止まず、過去最多記録が本年度も塗り替えられたことは、喜ばしい限りである。当委員会としても、教授会等でお願いをしたり、本学ホームページなどで広報活動を繰り広げたりするなどして微力ながら努力してきたつもりであるが、この慶事は何よりも、ゼミナールなどを担当される諸先生のご努力によりもたらされた賜物と考える。今後も、演習活動の活性化の一環として、この学生懸賞論文制度を積極的にご活用いただければ幸いである。

もちろん、応募数のみを誇ってばかりもいられない。解明すべき問題が不明瞭、注記不備等々、論文としての基本要件が欠けている、という従来からの問題のほかに、最近では昨年度の本稿でも記されている通り、ネットからの剽窃、切り貼りといった著作権侵害に等しいような深刻な問題も見受けられるようになった。審査する側の負担も決して軽くはないのである。

92編の応募論文は厳格な審査の対象とされ、最終的に、入選作として7編が選ばれた。学長特別賞は本年度該当作がなく、優秀作3編、佳作3編、準佳作1編という結果となった。入選作7編は問題意識が明確で、論理展開もしっかりしていると各審査委員から高い評価を得たものである。今回選外となった論文のなかには、惜しくも紙一重で入選レベルに達し得なかったものもあり、学長特別賞が本年度該当作なしとなったことは残念であるが、全般的に見て、論文水準が低下しているというわけでもないことは申し添えておきたい。

最後に、魅力的なテーマの論文をお寄せいただいた学生諸君一人ひとりに感謝するとともに、ご多忙中にも拘らず、審査のために多大の時間をお割きいただいた諸先生はじめ、事務担当としてご尽力いただいた学部事務課、教務課、総合研究所の職員の皆様など、関係各位に厚く御礼申し上げます。

2010年3月

学生論集刊行委員会

村上 伸一（経営学部）  
津田 直則（経済学部）  
石田あゆう（社会学部）  
岡田 章子（国際教養学部）  
馬場 巖（法学部）